

## つぎのないひはつきなくて

「あ、咲。月よ」

舞に言われて見上げた空に、のんびり月が出てた。

すっかり夜になっちゃった、学校からの帰り道。冷

たい風の中に、なんだかあったかく光ってるな。

「細っそいね」

あたしがそう言ったとたん、隣でぱたん、って音がした。

スケッチブックが閉じた音。いままで、歩きなが

らなにか描いてたんだね。

「これから、どんどん細くなるわ」

鉛筆をカバンにしまってる舞が、ぼんやり照らされてる。あたしは、また見上げた。

「なんかさ」

思わず口に出ちゃったあたしのとなりで、ん？って  
いう気配がする。

「月ばっか見てる気がするなあ。今年は」

カサカサって音がして、あたしの前になにかが  
ってきた。

「そうね」

透明な袋に入った、黒くて丸いものがいくつか。舞  
がまっすぐ伸ばした手の先に、ちょこん、って乗っ  
てる。

そっか、もっすぐなんだ。

「今月は、つぎの日曜、ね」

てくてく歩くあたしたちを、細い月が、ずっと  
照らしてた。

\*\*\*\*\*

「最初は、舞が言い出したんだよね、これ」

日曜の夜。わたしの家に来た咲が、いきなり言っ  
たの。

わたしが部屋のすみから、三方をふたつ取り出し

たとき。

「そうだけど きつかけは、咲よ」

わたしは、小さい三方にあの黒いのを乗っけながら、そう言ったんだけど、

「そうだった？」

もう、咲ったらすっかり忘れちゃってるんだから。

「咲、言ってたじゃない。』なんだか、もう月が出ないみたい』って」

「それ、舞が言ったんじゃない？」

はあ。ひとのことは覚えてるのに、自分のこと忘れちゃうのよね、咲って。 まあ、らしいけど。

それじゃ、大きい三方には、さつき作ったのを乗せて、と。

「ちがうわ。ちゃんと覚えてるもの。新月で暗い夜、一緒に学校から帰った日よ

さ、できた。ベランダ行きましよ」

\*\*\*\*\*

ベランダに行く途中、お兄ちゃんとすれ違った。咲がちよつと縮こまっちゃったけど、ふたりとも会釈だけしてそのまんま。

最初はヘンな顔してたなあ、お兄ちゃん。なんでそんなことするの、っていう顔で。でも、手伝うって言うてくれたとき、お兄ちゃんでも男の子はダメ、って言ったらもう何も言わなくなっちゃった。むかしから、女の子のことにはあまり関わらないのよね。お兄ちゃんは。 あら？ でも咲のこと、よく見てたりもするわよね？

「 やっぱり、きつかけって、舞だよ」

「 え？ きやつ!？」

そんなこと考えてたから、咲の声が聞こえてきた瞬間につんのめりそうになった。

目の前に回りこんだ咲が、三方ごとわたしを受け止めてくれて、ほっとしたけど、

「そっか、忘れちゃったんだ」

頭をかきながらこつち見てる咲が、とつても複雑な顔してるわ。

あきれてるみたいなの、ほっとしたみたいなの、困ってるみたいなの？

「夏休みが終わって、授業始まった日にさ、先生が出席番号順に当ててったじゃん。けど ふたり分、飛んでてさ」

あつ！

「英語でも、数学でも、歴史でも。あたしもイヤだな、って思っただけ」

体育で、跳び箱跳ぶ順番が飛ばされたときだったよね。舞が手で顔おさえて、泣きだしちゃったの」

「そ、そうだった？」

そう言いながら、わたしはペランダに飛び出した。暗い空の下なら、赤い顔がわかんなくなるから。

思い出したわ。あの日、ぼっかり空いた——満（みみ）さんと薫（かほ）さんの机のあとを見るのがイヤで、ずっと窓

の方ばかり向いてたのを。ずっと我慢してたんだけど、体育でとつとつ耐え切れなくなっちゃったのを。

「そうだよ。ごまかすの大変だったんだから。」

で、その日がちょうど新月でさ。真っ暗な空見ながら帰ってたら、舞の泣き顔思い出しちゃってね。怖くなつたんだよ」

咲がわたしを追い越して、ペランダの手すりから空を見上げてた。

「そっか」

わたしは咲のとなり立って、間にふたつの三方をそつと乗せた。

咲との間にある三方には、黒いお月見だんごが静かにすわってた。

\*\*\*\*\*

しばらく、あたしは黙って、月のない夜空を見上げてた。

「泣き出しちゃったの、ほんととはあたしが先なんだよね」

真つ暗な空を見てたら、つい口からこぼれちゃった。舞はなんにも言わない。聞こえなかったのか、聞こえないふりしてるのか知らないけど。

あたしは横目で舞の顔を確かめてから、また空を見上げた。

——夏休みの間、学校に行くのはソフト部のあたしの方が多かったんだ。

だから、なんとなく、ほんとに、なんとなくなんだけど、みんなにも何度か話してみただよ。ちよつと変わった子がいたよね、どうしてるかな？ っ。そしたら、ちよつど舞が来るとき、仁美と優子が言っただ。『ああ、ブアイソーな子？』って。

『思い  
』  
『出してる  
!?!』

舞とあたしで顔見合わせたっけ。あのときのあたしは、何も考えなくて、みんなに話そうとしたんだよ。

『みんな、それっ いたたたっ!!』

舞！ なにすんの よ？』

だけど、舞は考えてた。

『ダメよ、いま思い出させちゃ』

あたしより、ずうっと。

『みんなにも、こんな思いさせたいの!?!』

いまでも、はつきり耳に残ってるよ。ほかの人に聞こえないくらい小さな声。だけど、

『思い出しても、なにも なにもできないのよ？』

こんな思い、わたしたちだけで、いい っ!!』

胸がつぶれるくらい、痛くて、苦しい声。

それで、あたしは思わず泣いちゃったんだ。回りに優子たちがいるのに、もつどつしよつもなくなくて——

「咲 いい？」

となりから、声が聞こえてきた。あのとときと同じ口だけど、いま出てくるのはやさしい声だね。

あたしが舞のほうを向いてうなずいたら、ぱん、って音がした。舞がひとつ、手を叩いたんだ。

「それじゃ、始めましょ」

\*\*\*\*\*

大きい方の三方から、黒いお月見だんごがひとつ、消えた。

「さっき？ 食べるのは、お祈りのあと！」

口に入れる寸前で、なんとか指が止まったわ。ふう。

「ごめんごめん。お腹すいちゃってさ」

しょうがないなあ、って思うけど、クギだけはさしておかなくちゃ。

「小さい三方のならいいわよ」

につこり笑って言うてあげたら、苦笑いが帰ってきた。

「カンベンしてよあ。もう、2ヶ月たってるじゃん、それ」

わたし、思わず吹いちゃった。2ヶ月、か。もう、そんなになるのね。あの日から。

——あのととき、咲の声を聞いて、わたしもすっごく怖くなったのよ。

『なんかもう、月が出てこないみたいだよ』

もう本当に、二度と会えないんじゃないか、って。そう思っちゃうくらい、怖いことばだった。

覚えているのは咲とわたしだけ。ほかの誰にも言えない。言っちゃいけない。フィリア女王には『強く思い続けろ』って言われてるけれど、このまま黙っていつまでもなんて、とても

ちよつとまってる。

『ねえ、咲。きょう、お月見しない？』

『お月見？ って、今日は月なんてないよ??』

ぼけっ、とした声の咲を見て、思わず笑いそうに

なっちゃった。そう、そうよね。おかしな話よ。つきのないお月見なんて。

でも、それでもいいじゃない。黙って、じゃないだもの。

『そうよ。黒いお月見だんご作って、闇夜にお祈りするの。つきが、また——』

咲の顔がすこし柔らかくなったのを見て、私は思ったの。これでいいんだ、って——

「それじゃ、いくわよ？」

——『つきが、また満ちますよっ』

「——『かぜが、また薫りますよっ』」

咲とわたしの声が、闇夜に響いていった。

\*\*\*\*\*

「この間ね、安藤さんが思い出しかけてたのよ」  
お祈りが終わったら、舞がお茶を出してくれた。大

きな三方に乗った、しょうゆ味のお月見だんご食べながらお茶飲んだと、毎度だけどほっとするんだよね。

「お掃除の時間にね、机のあったとこ、じーっと見たの。なんで机がないんだらう、って顔で」

真つ暗な空の下で、このときだけ話すんだ。みんなが、ちょっとだけ思い出していること。

「みのりもだよ。宿題持ってお店に出てきたと思ったら、外のテーブルのとこまで行って、しばらくじっとしてたっけ」

ほっとするのって、お茶とおだんごのせいだけじゃないや。ひと月分、黙ってたことを声に出していると、からだが軽くなってく感じがするもんね。

「消えてないね」

「うん。消えてなんかいないよ」

目の前の顔が、すっきりした笑顔になった。舞も同じなんだ、って思えるの、今はすっごく嬉しいんだよ。

\*\*\*\*\*

いつの間にか、大きな三方のおだんごがカラになつてゐる。今月はおしまいだね。

また来月　来月の、つきのない日、か。

あたしはちよつと、小さい三方のおだんごにさわつてみた。一番最初に作った、黒いお月見だんご。もうカツチカツで、すこしハゲてきちゃつてゐるの。

「つきのない日　いつか、尽きなくちゃ、ね」

あたしがうなずいた瞬間、ぱあつ、と光が動いた。ふたりで見上げた空に、流れ星の終わりのところが、ほんのちよつとだけ見えてゐる。

偶然、だよ。普通に考えたら。でも、

「心配しないで」

「だいじよぶだよ。がんばるから」

あたしたちには、その向こうに見えたんだよ。ほんとにちよつとの間だけ見せてくれた、あのふたりの笑顔が――

\*\*\*\*\*

「――なに、これ？」

その月の、つきのない日。わたしの家のベランダには、ちよつとだけ無愛想な顔がふたつ、並んでたの。

「お月見だんごよ、満さん」

わたしがそう言つと、ふたり――満さんと薫さんが、顔を見合わせちゃつて、

「お月見？」

「月がないのに？」

ふふっ。吹き出さないようにするのがたいへんね。

「そう！　つきのない日のお月見だよ」

咲が、二カツ、つて笑顔で応えてくれた。咲のこういふとこ、とっても助かるわ。

「お月見だんご　黒い、のね？」

満さん、まだ納得できないみたい。しかたないかもしれないけど。

「つきのない日のおだんごだからよ。さあ、召し上

がれ  
」

ちよつとだけ咲のまねして、にこつ、って笑ってみたら、薫さんの手が伸びてきた。

「薫？」

「咲たちがいいなら、いいんじゃない？」

やっぱり不思議そうだけど、満さんも食べてくれる。うん！

「さあ、食べて食べて。なんとって今日は、ただの

『つきのない日』なんだから」

おだんご運んでる咲の向こうに、ほんのちよつと柔らかくなつたふたりの顔が見えた。

ただの『つきのない日』 尽きないと、いいな。

—おしまい—